



プロンキーパーに乗って

「食事の献立はなにかな。」「介助してくれる担当の人は誰かな？」というのが、毎朝通所しての第一声でした。
隼人さんの場合、5年前に作業所に通所した当初は、食材をきざんで食べたものの、むせ込むことなく食することができ、摂取量も8割から完食という状態でした。

給食の楽しみは食べる ことだけではない

隼人さんは給食の時間が好き。「食事の献立はなにかな。」「介助してくれる担当の人は誰かな？」というのが、毎朝通所しての第一声でした。
隼人さんの場合、5年前に作業所に通所した当初は、食材をきざんで食べたものの、むせ込むことなく食することができ、摂取量も8割から完食という状態でした。

しかし、肺炎での入院をきっかけに主食（ご飯）が常食から軟食に変更となり、次にトロミ剤を使うように、続いて誤嚥を防ぐために摂取量を制限、最終的にはミキサー食で摂取することになりました。隼人さんは側弯が進行していた、10代後半で片方の肺がほぼ機能しない状態と診断されました。この状態で誤嚥性肺炎になってしまふと生命の危機となる状況下での食事でした。

自分の身体の状況を理解したうえで、それでも彼が食事をし続けていたかったのは、給食が美味しいのはもちろんですが、担当職員との会話も楽しみの一つだったのです。ある男性職員との給食の間は、緊張が強まることも誤嚥することも少ない状況が多く、きっと隼人さんとその男性職員との絶対的な信頼関係が成せることなんだと感じました。
現在では唾液によるむせ込みもみられ、家族の希望もあり食事摂取は中止となりました。給食を楽しみにしていた隼人さんの「ごち

北海道・旭川・あかしあ労働福祉センターの実践

北の大地の仲間たち

2019



きょうされん大会のオープニング合唱（センターにいるのが筆者と隼人さん）

第2回 労働は生きている証

ダイアクティビティセンターあかしあ
看護師

豊田久江

悩みごとへの対応

前号で紹介した隼人さん（23）は仕事が大好き。そして、「昨日はなに食べたの？」「週末はどうするの？」といった、仕事に交わす職員とのコミュニケーションが彼のモチベーションを上げる源になっています。しかしアテトーゼ症状のため、自分の意に反する緊張の変動が出現することも多く、それにより発語ができず、さらにその緊張がくり返されるといふ問題があります。

彼の緊張が強い日は、会話の一言一言が言葉になりにくく、聞いている職員も上手に聞き取ることができません。それが本人のストレスとなり、「呼吸が苦しい」「頭が痛い」といった訴えとなり、仕事を続けることがむずかしくなります。そのため、緊張を和らげつつ、仕事を継続し、なおかつ彼のモチベーションを上げていくように、プロンキーパーに乗り緩和を図ります。緊張が緩和されれば会話も成立するので、いつも時期を

みて話しかけます。

本人の発する一言で予測のつく会話もあり、結論を導いてあげることも可能ですが、すべてを誘導して会話を進めるのではなく、隼人さん自身の言葉で最後まで聞けるように心がけています。発語の練習をしつつ、自分自身の言葉で伝え、「僕の言うことが伝わった」「僕のことを理解してくれた」という達成感のなかで仕事や活動へのモチベーションを継続することが大切だと思っています。

もう一つの悩みは、自宅での緊張があまりにも強く、抗けいれん剤を使用してからの通所となることです。薬の副作用による脱力と眠気が日常生活と仕事する上での支障にもなり、本人にやる気があっても、仕事にならない日も多いという現状です。そんな時は隼人さんの興味のある話をし、覚醒を促します。好きなアニメやドラマの話をしたり、好きな曲を聴いてもらい、一緒に歌うこともありまふ。ただ覚醒していても、職員がその場を離れてしまうと、すぐに目

そうさまでしたあ」という語尾を上げる声が聞けなくなり、給食の時間が少し淋しく感じています。いま、彼の栄養補給は経腸栄養剤にトロミ剤を混ぜ、胃ろうより注入しています。トロミ剤を使用することで空腹感の訴えはなくなりましたが、給食を食べたいという願いはいつそう強くなり、昼食時は仲間と少し距離をとるようになりました。

本人によると「匂いがしてつらい」と言います。きっと本心は、食事を通して会話ができない淋しさから距離をとるようになっていふのではないかと私は思います。本人は「いつかまた、給食が食べられるかな？」と話していて、「いつかそんな日がまた来るといいね」と隼人さんと話しています。むせ込みによる誤嚥のリスクを避けたいという家族の願い、少しでもいいから給食を口にしたいという本人の願い、どちらの願いもよくわかります。

しかし、命の危険性を考えると、現時点では彼に対する給食の